

スイス山岳農民の宗教世界—近世に残る“太古の信仰”

2007. 12.22 踊 共二
(武蔵大学人文学部)

はじめに

宗教改革と市民革命にはさまれた「近世」という時代、とりわけ17世紀をどう捉えるかについては、歴史家によってさまざまな見解の相違がある。「社会的規律化」というタームを用いながら「命令と服従」の秩序の生成を強調する論者がいる一方、この議論を宗教にも拡大して「上からの」（つまり国家権力と教会が結びついて推進された）「宗派化」の過程——すなわち個人の内面、世界観、歴史認識、日常生活、社会、国家、外交政策などを「宗派化」する運動、つまり特定の宗派のドグマによってそれらを「規格化」「統一化」する運動——を描き出そうとする歴史家もいる。彼らの研究を批判しながら、共同体（都市や村落）による「自己規律」や「下からの宗派化」を説く学派もある。他方、宗派ないし分派の乱立および複数宗派の常態的な併存地域（国家や領邦や自治都市や自治農村）の出現のなかで信仰の「個人主義化」ないし「プライベート化」が起こったのが近世という時代の特徴であると指摘する学者もいる。改宗と亡命をつうじて宗派の境を超えた人々（自律的に宗派変更の決断を下した人々）についての実証的研究も盛んである。さらに、民衆文化研究や民俗学の研究者たちは、古い呪術的信仰や自然崇拜の世界を描き出し、「宗派化」の限界を明らかにしている。このこと自体は、だれにも否定できない事実である。

しかし問題は、世俗権力と教会がスクラムを組んで推進しようとした「規律化」や「宗派化」の試みが、いったいなぜ貫徹されなかったか、である。民衆の抵抗の“底力”か、それとも国家権力の脆弱さか、あるいは宗派教会の未成熟の結果であろうか。この報告は、ひとつのケーススタディとして、近世スイスの都市ルツェルンの当局者（書記官）レンヴァルト・ツイザート（Renward Cysat, 1545-1614）なる人物に焦点をあて、権力の担い手である都市エリートが民衆（農村住民）の宗教世界（すなわち「宗派化」されざる民衆宗教の世界）とどのように対峙しようとしていたかを明らかにする試みである。なおツイザートは、農村での聴き取りや実地調査によってスイス（アルプス）山岳農民の宗教世界を克明に記録した人物であり、「スイス民俗学の創始者」とも呼ばれる。

ところでツイザートは、イタリアのミラーノからの移民チェザーティ（Cesati）家の出身で、家業は薬剤師であった。彼は書記官や市参事会員をつとめた後1597年に騎士の称号を与えられた門閥市民である。都市の古文書を自由に閲覧できたこともあって、ツイザートは郷土の地誌や自然誌、博物誌の研究にとりくみ、また懇意であったイエズス会関係者を通じて得たアジア情報なども研究し、日本におけるキリスト教布教および日本の文化と社会についての書物も書いている。さらに比較（対照）言語学のような仕事も残している。また植物学にも造詣が深く、自ら植物園をつくっている。

I 都市ルツェルンにおける宗派化と規律化

レンヴァルト・ツイザートの時代の都市ルツェルンは、トリエント公会議（1545～63年）の理念に従ったカトリック改革（反宗教改革）の一大拠点であり、指導的な聖職者たちと為政者（都市当局）は手を携えて教区司祭・修道士の綱紀粛正をはかり、民衆世界の迷信と不道徳を矯正して「正しい信仰」を確立しようとしていた。ツイザート自身、1573年から市参事会員として、75年以降は市書記官として教会と社会の改革に尽力しており、ルツェルンへのイエズス会の招致（1574年）や神学院の設立（1577年）は彼の働きがなければ実現しなかったと言われる。ルツェルンで起こっていたのは、ヨーロッパの随所で確認される「宗派化」と「社会的規律化」の動きである。

イエズス会の到来以後、ルツェルンでは聖職者に対しては独身制の再確立の試みと違反の取締り、知的訓練の強化、信徒に対してはカテキズムによる正統教義の注入、聖体拝領と告解の回数増加、姦通・同棲・夜間の酩酊・大騒ぎ・舞踏・賭博・謝肉祭や待降節の乱痴気の禁止、高利や投機の抑制といった

改革が進められ、都市当局によって道德令の類が次々が発せられた。これらの改革はある程度の成果をあげたが、長期的には成功とは言えず、一六世紀末になっても礼拝に行かずに遊技に興じる若者や、教会に飼い犬を連れてくる男性、男性席にやってきて男性たちを挑発する女性までいたと伝えられている。農村部に目を向けてみると、そこは相変わらず民衆的信仰の世界であり、ツィザートが毎日のようにつけていた年代記および民俗誌的研究のなかには、この世界のありさまが克明に記録されている。以下、いくつかの典型的な事例を検討してみたい。ところで以下引用する資料の内容はツィザートが農民世界に取材したものであるが、中世の聖人伝・教会史・奇譚集の内容と一致するものや類似するものもある。こうしたテキストの内容は説教等をつうじて‘ものがたり’として民衆世界に受容されていたかもしれず、ツィザート自身がそうしたテキストに関する知識を援用して民衆の信仰世界を再構成した可能性もある。ただしツィザートの記録に現れる民間宗教のタームは（妖精や亡霊や悪鬼の名前を含めて）ほとんどのケースにおいて独特の“スイス方言”であり、そこには中世のラテン語テキストが民衆世界に及ぼした影響は認めにくい。部分的に影響があったとしても、土着的・自生的な古い信仰との複合物と考えられる。ともあれ、以下につづる種々の物語が、中世ドイツやフランスやイタリアの伝説と似ていたとしても、それはそうした伝説や信仰がヨーロッパ世界に古くから広く共有されていたことの証左ととらえるべきであり、スイス山岳農民の宗教世界が周辺の“大国”の写しであったと理解すべきではない。

II 山岳農民の宗教世界

1) 地の精, リギとピラトゥスのこびとたち

A. テキスト：「ルツェルンを囲む山々とりわけリギとフラックモント（あるいはピラトゥスの山）では、そのような男女のこびとたちがしばしば目撃される。それだけでなく、こびとたちは、人間たちとくに山地に家を構えて住んでいる牧童などに馴れており、彼らと言葉を交わしたり、差し出された食事をとったりする。[...]そして人間たちと短い会話を交わした後、医術を施したり、なくしてしまった物[のありか]や未来の出来事を言い当てたりする。そのためこびとたちは尊敬され、保護されている」。「彼らは灰白色で、長い髪と髭をたくわえた老人の姿をしているが、身体は非常に小さく、6歳か7歳の子どものようであり、白い服を着ていることもある。以下のことはすべて、過ぎ去ったばかりの年、1592年に、マルタース郡の裁判区の下級代官をつとめるハンス・ブーハーの身に起こったことである。彼はマルタースの森や山地で狩りや釣りを楽しむ日々を送っており、つね日ごろからこびとを見たいと思っていた。そして1592年のこと、壮健な身体に恵まれたブーハーはフラックモント[ピラトゥス山]の森にでかけ、都市ルツェルン禁令下のイム・グラーベンという土地のリムルクあるいはリムリクという小川で、いつものように釣り糸を垂れた。すると突然こびとが背後から襲いかかってきた。真つ昼間なのに姿は見えなかった。こびとは背後から彼の首に飛びかかり、川の方に向かって死ぬほど強い力で押さえつけ、怒った声で次のように言った。『おまえも私の小さい動物たちや家畜たちをしばしば苦しめ、殺害する手合いだから、私はおまえを懲らしめ、命令を与えるのだ。おまえは今後、二度とこの場所で私と私の小さい動物たちの邪魔をしてはならない!』と。こびとはこう言うと姿を消したのであった」。

B. 考察：「こびと Zwerge, Elfe, Erdmännchen, Herdmännli」/ 亡霊あるいは古い森の民：地の精ないし「こびと」の伝説はヨーロッパ中に存在し、Zwerge, Erdmännchen, Wichte, Alp, Elbe, Elf などと呼ばれ、中世においてはその起源について様々な解釈がなされており、たとえばツィザートは、いわゆる墮天使(Lucifer)とともに天から落ちてきたという解釈を紹介している。しかし、いくらこうしたキリスト教的な説明がなされていたとしても、ゲルマン古代の悪鬼たちとの結びつきは語源などからも確実であり、キリスト教以前の古い宗教が近世になっても消えずに残っていたことは明らかである。ツィザートが記している伝説からは、こびとが魔術ないし医術を使うこと、予言を行うこと、森の守り手であること、自然を荒らす人間を攻撃することがわかるのだが、その姿は、いわゆる魔術師とも重なり合う。民俗学においては、こびとの伝説には古代世界において森の奥深く、洞穴に住んで原始的な生活をしていたケルト系の先住民などの姿が投影されていると解釈する説もある。いずれにしても、ツィザートが報告しているように、16世紀末になっても、こびとをめぐる古い俗信は脈々と保たれていた。

2) 不死の伝説、リギ山の三姉妹

A.テキスト：「リギ山麓のキュスナハトに、ある敬虔な村人が住んでいた。彼には3人の美しい既婚の娘がいた。そのころキュスナハトの城に居を構えてこの土地を支配していたオーストリアの代官は彼女たちに目をつけ、この姉妹をダンスに興じている最中にかどわかし、城に連れてくるように手下に命じた。恥ずべき欲望ゆえに、姉妹を城にはべらせ、一緒に暮らそうとしたのである。しかし娘たちはこのことを知らされ、舞踏会をこっそり抜け出し、急いで山に逃れて身を隠した。彼女たちは、死ぬことなくそこに暮らしつづけ、ときおり人々に、とくに一族の子孫に姿を現して話を交わすといった不思議なことが起こるといふ」。別の箇所には「姉妹の泉 Schwösterbrunn」についての言及があり、彼女たちはその水を飲んで育ったという。そして「その姉妹は民衆にとっては神聖であり、不思議なことに今この山に生きて暮らしているが、その姿は不可視であるという妄想を人々はいだいている」とある。

B.考察。「森の女(妖精) Waldfrauen」/ 古代の女神たち：ツィザートが記録しているリギ山麓の村の伝説には、あきらかにキリスト教的とは言えない「不死」の観念が確認できる。民俗学者たちは、ヤーコプ・グリムの時代から、ゲルマン人(とりわけアレマン族やフランク族)の古い信仰として、泉や流水への崇敬の念をあげている。いわゆる「乙女の泉 Jungfraubrunnen」の信仰である。清らかな水は若返りや病気の治癒、さらに「不死」をもたらすという信仰がゲルマン古代から存在したとグリムは説明している(J. Grimm, Deutsche Mythologie, Bd. 1, S. 484ff.)。ところで、このリギ山の3姉妹の伝説においては、オーストリアの悪代官の追跡を逃れた女性たち、というきわめてスイスらしい、反オーストリア的な物語と、古いゲルマン世界の「森の女、森の妖精 Wildfrauen」の信仰が混じり合っていることも明らかである。なおグリムは、「森の女」というのはゲルマン人の戦の女神であるヴァルキュリア(Valkyrja)の神話的イメージと結びついていると論じている。ところで北欧神話エッダでは、ノルン(Norn./ 複数 Nornir)という運命の女神たちがヴァルキュリアに対応するが、その人数は3人である。なお、森の妖精は、たとえばフラウ・ホレ(Frau Holle)とかベルヒト(Bercht/ ペルヒタ Perchta)といった女性の姿(糸紡ぎ)の亡霊ないし妖怪のイメージと重なる面もあると言われる。書記官ツィザートは、リギ山麓で見いだした不死の3姉妹の伝説を「妄想 Won/ Wahn」と呼んでいるが、そこには、明らかにキリスト教以前の古い宗教に由来する素朴な信仰を見いだすことができる。

3) 死者の軍勢

A.テキスト：「一般大衆によってグティンスヘールないし死者の軍勢とよばれている、闇夜にさまようたぐいまれな亡霊について。この亡霊はヴティンスヘールと呼ぶ方が正しい。これはしかるべき最期にいたる前に命を失った人間、つまり自然な死に方をしなかった人間たちの魂を意味する。かくして彼らは、その後往生を達成できるまで、死んでもなお地上をさまよわねばならず、互に行列を組んであちこちを歩くのである。彼らはみな、どのようにして命を失ったかが分かるような目印をつけている。たとえば武器で殺害されたものはそれに対応する目印をつけているのである。そしてつねに死者のなかの1人が行列を先導し、『道を空けよ！ 死者が通る』と叫んでいる」。

B.考察。「死者の軍勢 wildes Heer, wütendes Heer, Wuotisheer/ wilde Jagd」/ ヴォータン(オーディン)の軍団：いわゆる「死者の軍勢」は、wildes Heerないし wütendes Heer つまり荒れ狂う軍勢とも呼ばれ、さらにツィザートが書いているように Wuotisheerとも綴られる。その語源は定かではないが、ヤーコプ・グリムはこれをゲルマン人の戦の神ヴォータンと関連づけており、この説をとる歴史家は今も多い。たとえば阿部謹也によれば、太古のゲルマンの神ヴォータンは死者の軍勢の指揮官として民衆の意識のなかで生き続けていたと述べている(著作集5巻, 415頁)。なおタキトゥスの『ゲルマニア』43章には闇夜を選んで行軍する「幽霊のごとき軍隊」の姿が描かれているが、中近世ヨーロッパの死者の軍勢はこうしたゲルマン古代の戦士のイメージとも関連していると考えられている。なお中世以降の伝承では、死者の軍勢は、不慮の死を遂げた人や洗礼を受けられずに死んだ子どもの亡霊として説明されることが多い。出現の時期はとくに12夜すなわちクリスマスから公現日(1月6日)。ともあれ、キリスト教的な説明がいくらつけられても、この死者の軍勢という観念は、キリスト教以前の古い俗信を底流としていると言える。この死者の軍勢の目撃談は、ツィザートの時代にもしばしば語られており、ツィザート自身あちこちでそれを耳にしている。なお、死者の軍勢に触れた中世の資料としてもっとも早い

のはオルデリクス・ウィターリスが書いたノルマンディーの『教会史』（1140年）であり、類似した伝承はヨーロッパ各地に見られる。

4) ポンテオ・ピラトの亡霊

A. テキスト：「この土地の古老たちがこの山〔ピラトゥス山〕についてさまざまなことを語っているばかりでなく、キリスト教世界の主要地域の代表的歴史家たちもまた、この山にまつわる不思議なことからについて記録を残しており、民衆の作り話や、場合によっては迷信的な妄想に信憑性を与えており、ついには次のように考えられている。すなわち、（この歴史物語を私は認めてもいないし了解してもいないが、これによると）〔ローマ総督ポンティウス・〕ピラトゥスはフランスのヴィエンヌに囚われの身となって自害して亡霊となり、その後この地の民衆から引き離され、別の場所に移された。すなわち、灰色の魔術師あるいは遍歴学生（と民衆が呼ぶ者たち）によって、永遠の苦しみを受けるべく呪いをかけられ、当時（おそらく）全ヨーロッパにおいてもっとも荒れ果てた恐ろしい土地と考えられていたこの山の高いところにある湖に移されたのである。ただしこの湖は、本来は湖と呼べるようなものではなく、山の水が流れ出せずそこに溜まってできた沼地のような場所である。[...] 民衆の言い伝えでは、昔と同じように今でもピラトゥスの亡霊がこの湖に住み、永遠の苦しみを受けているという。とくに、キリストの受難が説教で語られる聖金曜日には毎年、湖の真ん中に、灰色の長い髪と髭をはやした姿で椅子に座った格好で現れ、この時期に彼を見てみたいと好奇心からやってくる人々に言葉をかけ、彼らに恐ろしいことを命じようとするという。この湖に人が近づいて何かを投げ込むいたずらを働くと、その場所から猛烈な暴風雨が起きるともいう。都市当局もこの事態を真剣にとらえ（都市200年記念の文書に見いだされるように）、この湖に行くために山に登る企てを投獄その他の処罰に備する犯罪と見なし禁止したのであった」。

B. 考察：ピラトゥスは言うまでもなく、聖書に出てくる人物で、キリストの処刑を認めたローマ総督である。この人物の死の様については、聖書自体ではなくその後の伝承によって後世に伝えられているが、ツィザートの記述にはかなり混乱があるように思われる。ピラトゥスの亡霊の伝説は、たとえば13世紀のジェノヴァ大司教ヤコブス・デ・ウォラギネの聖人伝『黄金伝説』に詳しく記されている。これによると、キリストの処刑を許可したピラトゥスは皇帝ティベリウスの命令によってローマで逮捕され、獄中で自害した。ティベリウスは、イェルサレムから聖女ウェロニカが携えてきた奇跡の布すなわちキリストの顔の汗と血を拭った布（聖帛）を拜んで重病が癒えた体験ゆえに、キリストを死なせたピラトゥスを断罪したと言われる。ピラトゥスの亡骸はテーヴェレ川に投げ込まれたが、川に棲む悪霊たちがこれを何度も空中に放り上げ、洪水や暴風雨を起こしたので、ローマ人たちはヴィエンヌ（現フランス南東部）に遺体を運んでローヌ川に捨てる。しかし、ここでも悪霊の戯れによって同じ災難が起きた。遺体は今度はローザンヌ（現スイス西部）に運ばれ、最後には「周囲を大きな山々に囲まれた深淵」に投げ込まれた。ルツェルンの人々は、いつの頃からか、フィアヴァルトシュテッテ湖に臨む断崖の山を総督の遺骸のありかと信じるようになる。これがピラトゥス山の名のいわれである（標高2132メートル）。総督のむくろは、山中の縦の林のなか、黒い水を湛えた湖のほとりに埋められ、ツィザートが伝えているとおり、人が近づくと暴風雨が起きたという。中世においてはピラトゥス登山は禁じられていたが、密かに入山する者もあり、1387年にはスイス各地の司祭たちが禁令を破って登山を試み、逮捕されている。一六世紀には、湖に石を投げ込んでみると嵐が起きた（一五四八年）とか、山麓の牧童の小屋に黒い姿の悪魔が現れた（1584年）といった報告が残されている。一五九四年、ルツェルンの教会と都市当局は、ついに調査隊（首席司祭ヨハネス・ミュラーと数名の市参事会員）を山に登らせ、ピラトゥス伝説を「迷信」と宣言するに至った。そして湖を土で埋めたててしまう。ここには、ルツェルンのカトリック改革における迷信の根絶のたたかいの具体例を見ることができる。ところで、19世紀の民俗学者アーロイス・リュートルフによれば、中世の登山禁止令の隠れた目的はケルト時代に由来する樹木崇拜や泉の精霊信仰の封印であり、ピラトゥス湖周辺はそうした異教的礼拝の行われる場所であったとされます。なお、山中の湖に現れるというピラトゥスの亡霊の姿は、ゲルマン神話においてニクス（Nix, Nixe）と呼ばれる「水の精」と似通った要素が感じられる。ニクスは老人で長い髭を生やした姿をしていると考えられており、供物を捧げないと怒りをあらわにし、人を溺れ死なせたといわれる。キリスト教が普及した中世初期においても、水の精に捧げものをする習俗は長く残っていた（本来は子

どもを捧げる人身供養であったとされる)。アルプス世界は突然天候が変化する場所であり、そうした場所に古い自然宗教の痕跡が消えずに残るのも当然のことと考えられる。

5) 竜と竜の石

A. テキスト：「およそ 1421 年のこと、ある暑い夏の日、都市ルツェルン配下のグラーフシャフト・ローテンブルクという農村地帯に住むシュテンプリンという姓の農民が、もっとも日差しの強い昼ごろに、使用人とともに牧草地で草刈りをしていると、一頭の竜が二人の頭上を飛び、リギ山のほうからルツェルン市の向こう側にそびえる別の山、つまりフラックモントないしピラトゥス山と呼ばれる山に向かっていった。竜は<地面のすぐ近くを飛んだので>燃えるような熱と耐え難い悪臭を放ち、農民は気絶してしまった。しかし気がついてみると、竜の飛ぶ姿がまだあり、竜が地上に何かを落とすのが見えた。農民はいぶかり、その場所に行ってみた。使用人もついて行った。よく見てみると、竜が〔産み〕落としたものは、煮ごりのような、凝固した血液の塊であることがわかった。農民が杖でこれをつついてみると、その中に竜の石が出てきた。これはラテン語でトラコニテスといい、その効能については多くのことが書物に書かれている」。

B. 考察：聖書の怪物と異教の怪獣。「竜の石 *draconites*」の俗信と民間医療：上に引用した資料からは、ツィザートが竜の存在を疑っていないことがわかる。竜はそもそも聖書に登場する獣であり、キリスト教的思惟と密接に結びついている（竜の姿はさまざま、蛇ないし大蛇との区別は時として曖昧である）。ディオクレティアヌス帝の時代に殉教した聖ゲオルギウス（303 年没）は、中世において、竜を退治する姿で描かれているし、聖マルタの竜退治（タラスコンの伝説）も有名である。竜退治の物語は、キリスト教の聖人による異教的ないし悪魔的な怪物の制圧の物語であるが、民間においては竜ないし蛇にまつわる俗信は消えず、竜は富をもたらす生き物としてイメージされることも多かった。中世フランスのリュジニャン家に繁栄をもたらした蛇女メリュジーヌの伝説はあまりに有名である。なお竜の石や蛇の石の伝説もヨーロッパのあちこちにあり、民間医療に利用されることも多かった。ツィザートは薬剤師の家に育ったこともあり、この竜の石に非常に大きな関心を抱いており、彼自身「竜の体内から出た石はペストに良く効く *Draconites jst treffenlich guot contra pestum*」と主張して患部にこれを当てる治療法を紹介している。ところでレンヴァルト・ツィザートの孫のひとりにヨハン・レオポルト・ツィザートという人物がいる（Johann Leopold Cysat, 1601-1663 書記、市参事会員、農村部の代官を歴任）。彼は祖父の研究を受け継いでスイス中央部（フィアヴァルトシュテッテ湖地方）の地誌ないし自然誌の本を 1661 年に出版している（Johann Leopold Cysat, *Beschreibung dess Berühmbten Lucerner= oder 4. Waldstätten Sees, Luzern 1661*）。この書物のなかでヨハン・レオポルトは、祖父とまったく同じようにドラゴンの伝説を書き記し、さらに竜の石の医学的効能について記している。なお、くだんの竜の石（とされるもの）はルツェルン自然博物館に所蔵されているが、近年の調査によると、成分から判断して隕石ではないとも言われている。

III 都市エリートの内面

レンヴァルト・ツィザートは、空飛ぶ竜のことだけでなく、大蛇の出現についても、たびたび証言している。たとえば、その年代記には、次のような報告を残されている。「1609 年のこと、J・ルートヴィヒ・プフィーファー牧場の湿原を流れる小川のほとりに、恐ろしい大蛇（*ein grüwlicher Wurm*）が現れた。この大蛇を何度か見たことのある土地の農民の証言によると、その体長は矛槍（*Halmparten*）より長く、胴回りは人の太腿ほどもあり、あらゆる人に大きな驚嘆の念（*ein gross Verwundern*）を起こさせた」という具合である。20 世紀スイスの口承文芸学者マックス・リュウティは、ツィザートが伝える大蛇の物語を引用しながら、「異様なもの」に遭遇して驚嘆する心こそ伝説（*Sage*）の本質であり、そこには「古代的なもの、過去に属するものの力と神聖さ」への畏怖の念が隠れていると述べている。リュウティの解釈には、たとえばヘルダーやグリム兄弟の時代にさかのぼるロマン主義の精神と通底するものがあり、伝説の背後にはキリスト教以前の「太古の信仰」が措定されている。またリュウティの研究の間には、そうした古い神聖世界への彼自身の敬意とも言えるものが感じ取れる。一方、一七世紀の都市エリート、ツィザートの内面には、民衆的・迷信的なものを排撃する「上からの改革」の精神と、

「過去に属するものの力と神聖さ」に触れて「驚嘆する心」が入り混じっていたと考えられる。

ところでツィザートトの年代記には多種多様な「心霊体験」が書きとめられており、それらは「迷信」として退けられている場合もあるが、本人自身の「実体験」として描かれているケースもある。たとえば「ふたりの人が連れだって歩いていたり、ベッドを共にしているとき、一人が亡霊 (geist oder gespenst) の姿を見たり声を聞いたりしても、もう一人には何も感知できないことがある。たとえその人が目を醒ましていて、注意を促されてもである。そうした経験は私にもある」といった記述がある。また「1609年に私は、炎につつまれた亡霊の一群 (füwrige geister oder wandlende füwrige männer) が夜の湖を渡るのを二時間にわたって目にした」といった報告さえある。別の箇所では、夜にさまよう「死者の軍勢」(Wuotisheer)を古い迷信と呼んでいるが、彼自身、これと似通った亡霊を見たと言言しているのである。

20世紀初頭の言語学者レンヴァルト・ブランツシュテッターは、ツィザートを「スイス民俗学の創始者」と呼び、青年時代のツィザートは迷信の攻撃者であったが「老境に至って心の奥底で民衆の信仰 (Volksglauben) に拠り所を求めた」と論じている。半世紀後にツィザートの伝記を書いたヴァルター・フライは、やや慎重に、ツィザートはスイスの民俗を第三者としてではなく「その世界の内側に身をおいて」語ったと述べている。いずれの指摘も正しいと思われる。この都市エリートが農村に生きる民衆との間で、「異様なもの」に驚嘆する心、太古の信仰世界への畏怖の念を共有していたことは否定できない事実である。

おわりに

「社会的規律化」や「宗派化」(さらにこれらとしばしば連結させられている「文明化」や「脱魔術化」の理論)は、多くの場合、中心から周辺部へ、言い換えれば都市世界から農村世界に向かう波動としてとらえられている。しかし、レンヴァルト・ツィザートの事例は、近世の都市世界のエリートたちもまた、農村的なるもの、つまり原初的な宗教世界に由来する異教的な俗信の世界と内面的に切断されていなかったことを明らかにしており、そうした状況が「規律化」や「宗派化」の進行を妨げる一因となっていたという推論が可能である。近世における都市と農村の精神世界の異質性を強調しすぎるのは危険である。近世都市は平均的に規模が小さく、周囲は多くの場合、暗い森や荒地や山であり、またすぐそばに川があり、湖があり、また沼地があったことを想起したい。市壁の内側と外側は、法や身分の壁があったにせよ、経済的・政治的に両者は密着していた。農民たちは良い天候と豊作を願うなかで呪術の世界に生きていたと言われるが、良い天候や豊作への願い自体は農村部を食糧供給源としていた都市にも共有されていたのであり、両者の間に精神世界における絆が確認できたとしても、それは当然のことである。

参考文献 (抄)

□ Heinz Schilling, *Konfessionalisierung und Staatsinteressen. Internationale Beziehungen 1559-1659* (= *Handbuch der Geschichte der Internationalen Beziehungen*; Bd. 2, Paderborn 2007; Walter Hartinger, *Konfessionalisierung des Alltags in Bayern unter Maximilian I.*, in: *Zeitschrift für bayerische Landesgeschichte* 65, 2002, S. 123-156; Arno Strohmeyer, *Konfessionalisierung der Geschichte? Das Geschichtsdnken der Stände in Innerösterreich an der Wende vom 16. zum 17. Jahrhundert*. In: *Konfessionalisierung in Ostmitteleuropa. Wirkungen des religiösen Wandels im 16. und 17. Jahrhundert in Staat, Gesellschaft und Kultur.*, hg. v. Joachim Bahlcke und Arno Strohmeyer, Stuttgart 1999, S. 221-247. Winfried Schulze, *Gerhard Oestreichs Begriff 'Sozialdisziplinierung in der frühen Neuzeit'*, *Zeitschrift für historische Forschung* 14 (1987), 265-302; Heinrich Richard Schmidt, *Konfessionalisierung im 16. Jahrhundert*, München 1992; ゲルハルト・エストライヒ『近代国家の覚醒』/阪口修平他編訳 (創文社 1993); エストライヒ「ヨーロッパ絶対主義の構造に関する諸問題」F・ハルトゥング『伝統社会と近代国家』成瀬治編訳 (岩波書店 1983); N・エリアス『明化の過程』(上)(下) 赤井慧爾他訳 (法政大学出版局 1977)

□ Paul Warmbrunn, *Zwei Konfessionen in einer Stadt. Das Zusammenleben von Katholiken und Protestanten in*

den paritätischen Reichsstädten Augsburg, Biberach, Ravensburg und Dinkelsbühl von 1548 bis 1648.; Wiesbaden 1983; Frauke Volkland, Konfession und Selbstverständnis. Reformierte Rituale in der gemischtkonfessionellen Kleinstadt Bischofszell im 17. Jahrhundert. Dissertation, Göttingen 2006. Richard van Dülmen (Hg.): Entdeckung des Ich. Die Geschichte der Individualisierung vom Mittelalter bis zur Gegenwart, Köln 2001; Kaspar von Greyerz, Selbstzeugnisse in der Frühen Neuzeit. Individualisierungsweisen in interdisziplinärer Perspektive., Oldenbourg 2007; 拙著『改宗と亡命の社会史: 近世スイスにおける国家・共同体・個人』(創文社 2003)。

□Silke Götsch-Elten, Volkskunde: Übergänge zwischen den Fächern, in: Anette Voelker-Razor (Hg.): Frühe Neuzeit. Mit einem Geleitwort von Winfried Schulze, (Oldenbourg Geschichte Lehrbuch), München 2000, S. 203-216; Karl-Sigismund Kramer, Volksleben im Hochstift Bamberg und im Fürstentum Coburg (1500-1800). Eine Volkskunde auf Grund archivalischer Quellen. Würzburg 1967; Hans Moser Volksbräuche im geschichtlichen Wandel: Ergebnisse aus fünfzig Jahren volkskundlicher Quellenforschung, München 1985; R. van Dülmen und Norbert Schindler(Hg.), Volkskultur. Zur Wiederentdeckung des vergessenen Alltags (16. bis 20. Jahrhundert), Frankfurt, a. M. 1984; C・ギンズブルク『チーズとうじ虫: 16世紀の粉挽屋の世界像』(みずず書房 1984); 同『ベナンダンティ: 16-17世紀における悪魔崇拜と農耕儀礼』(せりか書房 1986); ピーター・バーク『ヨーロッパの民衆文化』(中村賢二郎・谷泰訳、人文書院 1988); R・ミュシャンブレッド『近代人の誕生』石井洋二郎訳(筑摩書房 1992); 踊共二『改宗と亡命の社会史—近世スイスにおける国家・共同体・個人』(創文社 2003)の序論を参照。

□踊共二「近世都市ルツェルンにおけるカトリック改革」、永田諒一編『近世ドイツ語圏史の諸問題と研究の現状』(科学研究費補助金研究成果報告書 2006), 125-133 を参照。踊共二「白い肌のアジア人: レンヴァルト・ツイザートの『日本誌』(1586)を読む」『武蔵大学人文学会雑誌』32-2 (2002), 1-33. 踊共二「近世都市ルツェルンにおけるカトリック改革: 宗派化と社会的規律化の帰趨」永田諒一編『近世ドイツ語圏史の諸問題と研究の現状』(科学研究費補助金研究成果報告書 2006 年)、125-133. ツィザートの民俗誌史料は Renward Cysat, Collectanea Chronica und Denkwürdige Sachen pro Chronica Lucernensi et Helvetiae I/2. Teil, hg. v. Josef Schmid, Luzern 1969 [R. Cysat, Collectanea と略す]. Renward Brandstetter, Renward Cysat 1545-1614. Der Begründer der schweizerischen Volkskunde, Luzern 1909. Walter Frei, Der Luzerner Stadtschreiber Renward Cysat 1545-1614, Luzern 1963; Alois Lütolf, Sagen, Bräuche und Legenden aus den fünf Orten Luzern, Uri, Schwyz, Uterwalden und Zug, Luzern 1862. Judith Gut, Renward Cysat, Dictionarius vel Vocabularius Germanicus diversis Linguis respondens: Edition und Untersuchungen, Münster 2006. Johann Leopold Cysat, Beschreibung dess Berühmbten Lucerner= oder 4.Waldstätten Sees, Luzern 1661. 民俗事典として Eduard Hoffmann-Krayer und Hanns Bächtold-Stäubli, Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens (HDA), 1927-1942. 中世の聖人伝・奇譚集としてヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』前田敬作・今村孝訳(平凡社 2006); ティルベリのゲルウァシウス『皇帝の閑暇』(青土社 1997 年)。その他, マックス・リュウーティ『民間伝承と創作文学』高木昌史訳(法政大学出版局 2001); ルドルフ・オットー『聖なるもの』山谷省吾訳(岩波文庫 1968); ミルチャ・エリアーデ『聖と俗: 宗教的なるものの本質について』風間敏夫訳(法政大学出版局 1969. Jacob Grimm, Deutsche Mythologie, 2. Bde., 1835 [Nachdruck: Wiesbaden 2003]。近代に編集された伝説の翻訳として浅井治海『アルプスの伝説』(新風舎 2002); 北増山暁子『イタリア異界物語 ドロミーテ山地 暮らしと伝説』(東洋書林 2006)。『阿部謹也著作集 5』(筑摩書房 2000 年); 伊藤進『森と悪魔』(岩波書店 2002); ウーヴェ・シュテッファン『反社会の怪獣ドラゴン』(青土社 1996)。